



おだわらを拓く力

～志民が歩んだ17年～

刊行のあいさつ

市政発展の一助たれ

「おだわらを拓く力」副会長 石川 信雄

「おだわらを拓く力」は、加藤憲一氏の政治活動を後援することを主目的として2003年11月に発足しました。役員及び事務局を中心に、多くのボランティアの方々を含む全員が、自発的にそして無償で活動してきました。組織の運営、財政の確立、市長との連絡調整、広報、役員会、総会、勉強会、選挙、会員増強等、多彩な活動を通じて3期12年に渡り側面から加藤市政を支援してきました。

加藤前市長は、その優れた才能と、民間や市民活動での実績を活かし、行政と市民、各地域で活動している諸団体や企業等と連携し、性別、年齢、職業にこだわらず、多くの人の意見、提案を参考にしながら、今までと異なる数々の新風による施策と実績を築きました。そして現状と将来の小田原に向け、自助、公助、共助による財政の健全化と市民生活の安定向上に寄与しました。

私は、このような貴重な実績が今後の市政発展の一助となることを願うと同時に、これまでの主要記録等が冊子にまとめられ、関係者はじめ多くの人々の共鳴が得られる事を期待しています。それぞれの立場から執筆、資料提供等にご協力頂いた多くの方々に深く感謝し、合わせて皆様の今後益々のご発展、ご活躍、ご健勝を祈念し、僭越ですがご挨拶といたします。

市民活動へ一石！

「おだわらを拓く力」事務局長 西側 恭二

2003年、小田原の地で持続可能な明るい未来を求めて、一人の若者（加藤憲一）が声を上げた。それは徐々に大きなうねりとなり、その考えに共鳴した人々によって彼と志を同じくする市民活動団体「おだわらを拓く力」が誕生した。

2004年の小田原市長選挙を経て、2008年には小田原市民は「加藤けんいち」を新しい市長に選んだ。当選直後の「さあ皆さん、これから今まで以上に忙しくなりますよ。あなた方が活動の担い手ですよ」という加藤さんの言葉が、その後の変化を象徴していた。

以後3期12年にわたり行政と市民はそれまで以上に一体となり、持続可能な社会の構築に力強く着実に取り組んで来、全国からは高く評価されるようになって来た。残念ながら2020年の市長選で544票の僅差により、加藤さんは市長を退くことになった。

加藤さんとともに歩んできた「おだわらを拓く力」は解散することとなったが、この17年間を振り返ると、2008年の市長選前後で、その活動目的は大きく変わっている。2008年以前は「加藤さんを当選させること」、以後は「行政と市民が手を取り合って、小田原のために行動すること」と言えるだろう。しかし、この間の取り組みには他の団体には見られない特筆すべき性格があった。

国内でも稀に見る先駆的市民活動団体「おだわらを拓く力」とは一体何だったのか、その軌跡を多様な関係者の証言などを交えて振り返るとともに、歴史的意味を整理し、全国における市民活動の共有財産としたいと考え、この冊子を発刊する。

目次

刊行のあいさつ	P2
特別インタビュー「小田原民主主義 第1章」の17年を振り返る	P4～5
第一章 「おだわらを拓く力」の活動	P6
第1期 黎明期(2003年4月～2004年5月)	P7～8
第2期 拡大期(2004年5月～2008年5月)	P8～9
第3期 実践期(2008年5月～2020年7月)	P10～13
活動を支えた人たち	P14
第二章 「おだわらを拓く力」の選挙	P15
選挙記録	P16～18
証言集「わたしと選挙」	P19
第三章 「おだわらを拓く力」の原動力	P20
証言集「加藤憲一さんというひと」	P21
座談会「おだわらを拓く力」に注いだ熱いおもい	P22～23
寄稿「わたしと加藤さん」 吉田雄人氏・井手英策氏	P24
歩みは止まらない 加藤 憲一	P25
第四章 「おだわらを拓く力」の軌跡	P26～27

表紙写真 2008 年の初当選後、初登庁に喜びあふれる市民

特別インタビュー

「小田原民主主義 第1章」の17年を振り返る ～「推譲する市民」による「新しい現実」作りへの挑戦～

2003年から17年にわたって活動を続けてきた「おだわらを拓く力」(以後「拓く力」と略)が2020年、散開した。活動を「終了」するのではない。あえて「散開」としたのはこれが「終わりではないからだ。「拓く力」の面々が野に散らばり、正解が見えづらい不透明な時代に、さらなる実践を模索し、知恵を持ち寄り合い「新しい現実」を創造する時期が到来した。

わずか数人から始まった「拓く力」は17年の間に6000人超にまで広がった。どんな人たちが何を求めて集い、そこで何がおきたのか。「このネットワークの中で、私は“市長という役割”を果たしただけ。主役は集まった1人ひとりの市民」という加藤憲一氏に「拓く力」の軌跡と価値について聞いた。(聞き手・宮島真希子)

宮島 「おだわらを拓く力」という名称は大変ユニークですが、会が生まれた背景・名前がついた経緯を教えてください。

加藤 私が最初に市長選に挑んだのは2004年でした(※1)。前年の2003年からネットワーク体「New Odawara Forum」を立ち上げ、小田原の可能性を生かし、いのちを大切にする持続可能な社会づくりを目指した構想を数人の仲間たちと練っていました。

当時の小田原は、市民会館の建て替え・ポートピア(場外舟券場)設置など、さまざまな政策が市民に知らされないまま進捗し、実施段階になって詳細が判明、反対運動が起きるという状況が頻発していました。閉塞感がとても強かったです。

その中で私は「いのちが大切にされ、市民が主役のまちづくりを実現するために自分ができることは何だろう?」と考えながら、構想をまとめていました。

「地方自治体のリーダーになる」と表明することについても、もちろん怖さもありました。ただ、怖さより「この地で生きていくと決めたからにはまず、自分が動かなければ」という覚悟の方が強かったです。私は「まず自分が実践する」スタイルで生きてきました。地元の名士や有力者の方々とは無縁でしたが、農業やまちづくりの現場で実践を重ねる中でともに志を同じくする仲間たちと出会い、信頼を育み、ゆっくりとつ

ながってきたように思います。

市長選挙にあたって政治団体をつくる際も、そんな関わりで知り合った仲間たちと「自分たちが作りたいのは”加藤憲一後援会”じゃない。市民のパワーを表すような新しさを名前に込めたい」と語り合いました。従来のトップダウン型政治ではない「市民が主役」であることを名前に込めたかったのです。

当時まとめた「新しい現実をつくる」という資料に私は「自分や家族の未来を、特定の為政者や地域の有力者に委ねる時代は終わった。自立した考えの下に、自ら動き、自ら責任を持つ多くの市民が、地域の課題を自らのテーマとして共有し、知恵と勇気を寄せ合う、そんな中からこそ『新しい現実』は生まれてくる」と書きました。

「拓く力」という言葉が出てきたのは、そのような思いを踏まえ、当時から小田原のまちづくりに熱心だった野田迅君たちと話していた時だったと記憶しています。「拓く力」という言葉は、自分たちのネットワークが目指したい本質をつかんでいたので「この名称でいこう」と決まりました。

宮島 「拓く力」の特徴は、どのような点でしょうか?

加藤 二宮尊徳の報徳思想の実践における重要な行動の一つに「推譲」(※2)があります。地域自給圏

聞き手・宮島真希子

元・神奈川新聞社記者。1995年~1998年に同社小田原支局・足柄支局で取材を担当。阪神大震災を体験した神戸市児童の小田原招待を取材したこときっかけに、当時子どもと生活文化協会事務局長だった加藤氏と知り合う。

などの具体的構想にそれぞれの問題意識をもって共感した会員のみなさんの「推譲」によって、「拓く力」の活動が成り立っていたと実感しています。

「拓く力」への参加は、それぞれの自発性に基づいています。会費も会員集めのノルマもありません。動員をすることもありません。選挙のプロからみたら「政治家の後援会の体をなしていない」と言われるような、とらえどころのないつながりです。

直接的な見返りを求めて集う人はおらず、それどころか皆さんは時間もお金も「持ち出し」で参加している。こうした緩いつながりであるのに、16年にわたって事務所を週3回開け、風の谷通信を通算89号発行し、月に1度の勉強会・フィールドワークを地道に開催することができたのは、小田原の未来を自分ごととして考え、行動する主体的な市民の力があったからです。また「こんなスキルがある人がいると助かるのに」と困っていると、必ず適任者が現れる。不思議と人の縁にも恵まれました。

宮島 「拓く力」は、関わった市民の行動を変えたと思いますか？

加藤 市長としての12年間、市民の力を發揮する舞台を整え、育む政策は「おだわら市民学校」を始め、様々な現場で展開してきました。基本は、熟議・対話を重視するスタイルです。こうしたやり方は確かに時間がかかります。

ですが「市民が自ら課題を発見し、提案を考え、実践に関わる」仕組みを動かし、その力を十分に生かす基盤を今、つくるなければ小田原のような地方都市は生き残っていけないという危機感がありました。

実践を積み重ねながら地域を変えていく営みはこれからも続きますが、地道に取り組む市民が増えていったからこそ、小田原市がSDGs未来都市に採択されるなど、客観的に評価される状況が生まれてきたと誇りに思っています。

宮島 2020年で政治団体としての「拓く力」の活動は一区切りですね。これから的小田原にとってこの16年はどのような価値を持つのでしょうか。



2020年8月 小田原市南町・清閑亭にて

加藤 「拓く力」の活動にピリオドを打つことを決めたのは私です。私自身は政治というフィールドから、また一民間人に活動の場を移し、自由に動き、つなぐべき人をつないでこれまで同様に「皆が生き続けていける地域」を目指しての実践を続けていきます。

このネットワークは2003年、私とその周りの数人から始まりました。今まで、私はどこにも所属しない1人に戻りますが、当時と異なるのは「拓く力の会員・6,000人超の緩やかな共感のつながりがすでにあります」という点です。

今回の市長選を終えて京都に旅をした際、私は三十三間堂（蓮華王院）で「千体千手観音立像」と対面しました。千体の観音像を見たとき、「拓く力」のみなさんのことが自然と思い出されました。それぞれの個性が生かされ、多様な行動で地域を変えていく1人ひとりの営みは、まさに大勢の観音による菩薩業であったと思ったのです。

政治団体としての「拓く力」は役割を終えました。けれど、目指す理念を共有し、ここで培われた経験や縁を得た人たちが未来を拓いていく力は、厳しい時代を迎える小田原にとってますます重要なになってくるでしょう。

※1 2004年5月16日投開票の小田原市長選。新人・加藤氏は、当時の現職に挑むも約6,000票差の31,244票で落選。

※2 二宮尊徳による4つの「報徳仕法」のうちの1つ。勤労・分度により、生じた余剰・余力の一部を子孫や社会のために譲ること。

第一章

「おだわらを拓く力」の活動



2006年1月 「新春の集い」にて

豊かな自然、歴史と文化、なりわい、人が集まる「可能性の大地 小田原」、その可能性を現実のものにすることを目指して生まれた「おだわらを拓く力」は、自らが考えて行動する自立(自律)した市民が集い、ひとくち千円の寄附とボランティアによって運営された、一切の『しがらみ』のない市民活動団体であった。

その組織は自主性を重んじ、良くも悪くも上下のないフラットな関係で成り立っていた。

また、その活動も、およそ政治団体らしからぬ名称と同様、ユニークなものがあり、誰でも気軽に立ち寄れて自由に意見を交わすことができる開かれた事務所運営や、制作から印刷、配布まですべて会員が自前で行う会報発行など、他の政治団体ではあまり見られない特徴があった。

第一章では「おだわらを拓く力」の創立から解散までの17年を3つの期に分け、量的・質的に異なるそれぞれの期間の活動内容を紹介する。

第1期(黎明期)

2003年4月～2004年5月

～この期の概要～

当面の目標として、2004年5月の小田原市長選挙に加藤憲一さんを擁立することを目指し、加藤さんの知人を中心に、その約1年前から始動していた。

2003年11月、政治団体「おだわらを拓く力」が設立される。後援会と選挙対策の体制づくりを並行して進めたが、政治・選挙に無縁だった者が大半で、試行錯誤の連続であった。一方で、マニフェストの発表、ミニ集会、駅立ち・辻立ち、各種印刷物の発行と配布、イベント開催、ホームページの開設など、その後の活動の基礎も作った。

選挙には敗れたものの、現職の市長に対して約6,000票差と善戦。加藤さんの知名度アップの点でも一定の成果を挙げた。

設立準備と組織の立ち上げ

2003年4月、加藤さん(当時38歳)とその知人約20人が市内の居酒屋に集合し、小田原のまちづくりのビジョンと翌年の小田原市長選挙への挑戦を語り合う。

その後、まちづくりのための活動を開始。後援会設立の時期に前後して、K2プロジェクト(K2=加藤憲一の略)という会議体を持った。月3回、毎回10人程度が出席、時には討議が深夜にまで及ぶほど白熱した。

「おだわらを拓く力」の事務所開き
2003年11月



資金不足を補うため、会議出席者は参加費500円を支払った。

その中で「事務局」「政策」「総務・会計」「広報」「アクション」といったセクションを作り、それぞれに長を置き、計画や予算建てなどを行ったが、会議のたびにセクションやその責任者の変更や追加がおこなわれるなど、実質、うまく機能したとは言い難かった。

また、メンバーもそれぞれ異なる背景をもって活動に参加、政治や選挙に携わった経験のない者がほとんどだったこともあり、常に手探り状態であった。

実際に組織の体が固まったのは、選挙戦が間近に迫った時期だった。

「おだわらを拓く力」の創設

2003年11月19日に加藤さんが翌年5月の小田原市長選への出馬表明(小田原市役所内にて会見)するのに先立ち、11月16日政治団体「おだわらを拓く力(加藤けんいち後援会)」を設立した。代表は、加藤さんの恩師でもある飯田和さん。

同日、所在地となる市内栄町のオービックビル2階にて、事務所開きもおこなった。

機関紙 「月刊HIRAKU CHIKARA」の発行

2004年1月から4月まで毎月発刊。加藤さんのプロフィールや活動の紹介、若手経営者や女性グループとの対談などを掲載した。

Vol.4では、「おだわら改革 7つの指針」と題した政策を発表、また市内を「中心市街地」、「海岸線地区」、

「川東北部・南部」、「橋地区」など10の地区に分け、それぞれの地域の課題とよりきめ細やかな政策を記載した10パターンを制作、地区ごとに全戸配布した。

その際、ポスティング業者に依頼するのと並行し、支援者自らが可能な範囲のポスティングをおこなった。会員による手配りの文化は、ここから始まった。

駅立ち・辻立ち

加藤さんの知名度向上や政策を広めることを目的に、市内の各鉄道の駅前や商業施設前で、加藤さんが街頭演説をおこない、その周辺で、会員があいさつをしたりビラを配布した。

2004年1月12日の成人式会場前を皮切りに、4ヶ月で市内17駅、計76回の駅立ちをおこなった。早朝にもかかわらず、地元の会員を中心に毎回10人程度が自主参加。以後、市長初当選まで定期的に実施された。

広報活動・情報発信

2004年11月から、加藤さんが執筆した文章をタウン紙に寄稿、以後ほぼ月に1回のペースで継続した。市政の課題に対する提言や持論を展開し、政策を広める場となった。

のちに公開イベントとも連動し、「医療・介護」「文化」「教育」「環境」など、イベントと同じテーマを取り上げて寄稿した。

2004年12月からは公式ホームページを開設。同じ頃、加藤さんの日々の活動の様子を綴った「かとけん日記」という名のブログもスタートした。このブログは市長就任後、「市長の日記」(小田原市ホームページに掲載)へと引き継がれていった。ホームページは、のちに動画を多く取り入れるなど、度々リニューアルを重ねる。

またメールマガジンやFacebookものちに開始、特にネット選挙解禁後には、効力を發揮した。



2004年2月、小田原駅前にて駅立ち

第2期(拡大期)

2004年5月～2008年5月

～この期の概要～

2004年5月の市長選落選を受けて、一旦組織を解散するも、同年7月、「新生・おだわらを拓く力」を再結成、4年後に向けた再起を期した。

加藤さんを小田原市長へと押し上げ、またその後の市政を担い、サポートする体制を整えるべく、加藤さんの知名度アップや政策の宣伝、会員の拡大や組織の強化、他団体との連携、市民活動への参加などを積極的に行なった。

ニュースレター 「Powers!」(機関紙)の発行

2004年12月1日に「創刊準備号」を発刊。紙面はA3サイズ、小野田明子さんが編集長を務めた。市内全戸配布を前提に約65,000部を、2008年5月の加藤さんの市長就任まで、ほぼ隔月で発行。ポスティング業者と並行して、会員自らが配布することも継続した。

内容は、巻頭記事を加藤さん自らが執筆、小田原市の抱えている課題への提言などのほか、市内の市民活動やイベント等の紹介記事を掲載。市議会議員選挙前や市長選の期間中には号外を出し、争点についての会の意見を表明するツールとして活用した。これは、継続的に機関紙を発行していれば、選挙期間中にも1回発行することができるルールによるもので、配布文書の種類が制限される中で他候補者に対して、アドバンテージとなった。

その後、機関紙としては2012年5月の第30号が最後となつたが、「Powers!」の名称は政策ビラやタウン紙上の意見広告等に引き継がれ、43号まで発行された。

ミニ集会

公民館や職場などで10～50名ほどが参加して開く集会。参加者に加藤さんと直接会って話をする機会を提供した。

2004年2月頃から熱心な支援者の呼びかけで散発的に行われていたが、2004年11月頃には市内を10の地域に分けて、それぞれ地区幹事という世話を役作り、その方々が主導して集会を運営した(名称は地域懇談会)。

ミニ集会に参加して

理事 宮崎 淳子

市内各地では、地域の公民館や、集会施設でミニ集会がたびたび開かれました。それぞれの地域の人たちと加藤さんとが身近に語り合い、同じ思いを共有できる絶好の交わりの場でした。市政についても忌憚なくお話ができる、貴重な集会であったと思います。

『自分たちの住む街は、自分たちで良いものを作り上げていく、そんな思いが、このような活動を通して私たちの中にも大きく育ちました。応援してきた一市民としてとても誇りに思います。

各種公開イベント

会独自の公開イベントとして、一般市民に広く参加を募った講演会、勉強会、上映会等を、多い年で年4回ほど実施した。

また加藤さんが代表を務めていたあしから総研主催の「小田原再生フォーラム」にも協力、経済・医療・介護・観光・環境・文化・教育・まちづくりなどのテーマについて、第一人者を招いた講演会や上映会を開催し、全国の先進事例を紹介・学習した。

2006年4月頃からは、前述の10の地域の地区幹事たちが企画を練り、地区主催のイベントも行った。栢山の二宮尊徳ゆかりの地めぐり、山王川河口～久野川源流の遡上、



機関紙「Powers！」



ミニ集会（梅の里センター）



2005年11月、山梨のワイナリーへのバス旅行



北部地区（尊徳ゆかりの地めぐり）



第1回小田原再生フォーラム



2006年11月、浅草寺へのバス旅行

他市町村の文化施設見学など、内容は多岐にわたった。

会員向けには、バス旅行や年次総会とセットの「新春の集い」など、加藤さん、会員同士の交流を図るさまざまなイベントを催した（詳細は後述）。

政策リーフレット等の発行

加藤さんのプロフィールや政策を紹介する、入会ハガキ付きの印刷物。会員自らの手で知人に手渡しし加藤さんを紹介、会員拡大に貢献した。

2007年11月制作のVol.2はA2サイズの大判で、若い女性にも手を取ってもらえるよう観光ガイドのような装丁にするなど、協力印刷会社の女性デザイナーと「拓く力」の女性陣の意見を重視して制作し、好評を博した。

資金集め

「拓く力」のスタッフは全て無給、また、交通費・食事代も自腹が原則であった。しかし、事務所の維持費やイベント・印刷代などの経費が掛かるのも事実。一時期、ひと口1,000円の会費を募ったこともあったが、会の趣旨にそぐわないと不評ですぐに廃止となり、会員からの自主的な寄付のみに依るものとなった。

寄付を募る際の名称としては「新しい、市長を、生む」の頭文字をとって「ASU(明日)資金」と名付けられたが、加藤さんの市長就任後は「あなたが、主役で、動かす市政」の頭文字に改められた。

第3期(実践期)

2008年5月～2020年7月

～この期の概要～

加藤さんの市長就任で、「拓く力」の役割は「市長当選を目指すことから、『行政と市民が手を取り合って行動すること』へと変わった。

加藤さんは市長(行政のトップの立場)だからこそできることを、「拓く力」は市民だからこそできることを相互に連携して実践する。そのために事務局には両者をつなぐ役割が求められることになった。

そこで、市の行っていること・行おうとしていることについて、紙媒体・電子媒体を通じた情報発信に努めるとともに、会員には、その核として市民活動の推進役や他の市民への伝搬役を期待した。

市政への市民参加

加藤さんが目指した、市民とともに創り出す「新しい小田原」の中核コンセプトが、「市民が主役の小田原、であった。「できる限り市民が参加する市政の実現が、様々な地域課題の解決と市民が願う小田原の姿へと進むうえでの鍵だ」という加藤さんの考えに基づいていた。

市長就任後すぐに、「駅城周辺のまちづくり」、「財政再建」などの検討委員会の立ち上げを皮切りに、自治基本条例や地域コミュニティ等の重要な計画づくりへ



「新しい小田原への歩み」の決意をしたため

の市民参画を実行した。検討委員会は、論文による公募を経た市民委員と、諸団体の代表そして市職員で構成され、月に1度の会合では、忌憚のない意見を出し合った。

その後、市民が中心となり、10のテーマで地域活性化を進めた「無尽蔵プロジェクト」をはじめ、環境再生、生ごみ堆肥化、身近な公園プロデュースなど、多くの市民が気軽に参加できる場が生まれ、市民主体の活動へと発展していった。

上記活動には多くの「拓く力」の会員が参加した。

検討委員会に参加して

理事 近藤 忠

加藤市政初期の、地域コミュニティと環境再生プロジェクト、この2つの検討委員会に市民委員として論文応募し、他の市民とともに選出されて委員会に携わりました。一般市民の率直な願いや想いを、委員会を構成する皆の同意を得ながら、どのように報告書に盛り込むか、市民委員全員でほぼ毎日、活発に情報交換しながら取組んでいたことを思い出します。楽では有りませんでしたが、充実していました。

当初は対立模様だった委員会も終盤には一体になり、充実した中間報告内容を全員で共有できました。世代や考え方の違いはあっても、共通の目標に向けて互いに理解しあう努力の必要性を実感する体験でした。

生ごみクラブのこと

前生ごみクラブ会長 笠原 久弘

加藤さんの肝煎で、2010年度から小田原市民による生ごみの堆肥化プロジェクトが始まりました。以前から個人的に生ごみの堆肥化を進めていた人たちが自主的にサポートとして市民団体を立ち上げ、「生ごみクラブ」として活動することになりました。

プロジェクト開始後、サポートもだんだん増え行政とともにプロジェクトを強力に進めることができました。その成果はNHKも知ることとなり、2012年度のNHK高校講座「科学と人間生活」で取り上げられました。

現在は、「生ごみ通信」の発行・配布による広報活動、「朝ドレファ～ミ♪」店頭での普及活動などを行っています。

イベント開催

「市民の手でどのような社会を築くのか」を学習する機会は、市長1期目も上映会や講演会という形で引き継がれた。

当選2年後の2010年6月には、マニフェストを掲げて市長に当選した加藤さんの「マニフェスト進捗状況評価」の報告会となる「マニフェスタ2010」を、関東学院大学教授出石稔先生の協力を得て開催した。会場中庭では各種団体によるバザールも行われ、盛り上げた。

若年層の市民活動に対する興味・関心の喚起を目的に、若手女子に企画を依頼した「わっしょい!小田原」は、開催直前の東日本大震災により、若干の出演者の変更のもと半年遅れで行われた。東日本大震災直後の2011年6月には、被災地の福島県相馬市から立谷秀清市長を招き、「東日本大震災から学ぶ」を開催した。

勉強会・現地勉強会

加藤市政が2期目に入ると「市政の現状はどうなっているのか」や「今後はどうなるのか」について、直接市長から話を聴く「勉強会」が企画され、メールマガジンや「風の谷だより」等で周知し、各回約30人の参加のもと、計15回実施した。

2015年、当初企画したテーマの勉強会が一巡したところで、室内での座学から現地に赴き五感を使って学ぼうという「現地勉強会」へと発展した。各回とも市長からの全体的な話の他に、直接関わる市職員からの具体的説明もあり、市職員の取組み方や熱意も感じられ、とても好評であった。

2019年8月には、小田原市がSDGsモデル都市・



環境都市に選定されたことを受け「SDGsとは?」という疑問をテーマに勉強会を開催した。

勉強会のテーマ

- 2013.2 今後の市政運営
- 2013.4 「中心市街地活性化基本計画」の概要および特筆すべき部分
- 2013.6 小田原市が進める地域コミュニティに関する取組
- 2013.8 「子供にやさしいまちづくり」への取組
- 2013.10 地域の中でお互いを支え合う仕組みづくりの「ケアタウン構想」
- 2013.12 小田原駅地下街再生・芸術文化創造センター・お城通り再開発
- 2014.2 地域経済振興策に関連するこれまで及びこれからの取組
- 2014.4 26年度予算のポイントとその具体的な取組
- 2014.6 農林水産分野の取組状況と今後の方向性
- 2014.8 上下水道や道路橋梁など公共インフラの状況
- 2014.10 学校教育の現場の課題や各種取組
- 2014.12 斎場やゴミ処分場などを含めた広域行政と今後の都市制度への対応
- 2015.2 地域医療をめぐる態勢の整備や今後の課題
- 2015.4 人口減少社会への基本スタンスと今後の取組
- 2015.8 スポーツ振興や健康づくりの取組

現地勉強会のテーマ

- 2015.7 特定漁場整備計画・小田原の魚のブランド化(小田原漁港)
- 2015.10 小田原市における林業活性化(いこいの森)
- 2016.9 天守閣リニューアルの背景(小田原城)
- 2017.2 環境事業センターと小田原フラワーガーデン
- 2017.9 城山陸上競技場と白秋童謡の散歩道
- 2018.10 十字町界隈の街づくり(小田原文学館・旧松本剛吉別邸ほか)

交流活動

初当選直後には「地区別ミーティング」を各地区で開催した。川東地区ではその後も継続したが、他の地区では継続は難しかった。その後地区幹事を中核とした役員会が組織され、「拓く力」の方向性を審議するようになった。こうして次第に組織としての体裁は整ってきたが、あくまでも任意の団体であり組織としては強制的ではなかった。

選挙が近くなるとそれに向けた活動が増えていったが、そうではないときは会の維持・運営が事務局の主な活動であった。

※ ※ ※

「新春の集い」は、総会、市長からの市政報告、ゲストとのトークで構成されることが多く、ゲストには近隣首長、事業者、学者等を招き対談や座談会の形式で、小田原市についての外部評価を語ってもらった。さらにアトラクションとして寿獅子舞保存会や小田原少年少女合唱隊など小田原と関わりのある団体を招き、その活躍ぶりを参加者に広められるよう工夫した。

年一度のバス旅行は、加藤さんと会員がゆっくり触れ合える貴重な場なので、親睦とともに加藤市政の理解にも役立つ企画に腐心した。具体的には、見学先に自然エネルギーの先進地や尊徳の教えの生きる所を選んだり、車中や昼食会場では加藤市政にまつわるクイズ大会やじゃんけん大会を



齊藤栄熱海市長と海老根靖典藤沢市長(当時)とともに



寿獅子舞保存会がゲストの2013年新春の集い

行い、加藤さんの直筆色紙や小田原の地場産品を景品にするなどした。

※ ※ ※

事務所には寄付を届けに来られる方、情勢を聞きに来られる方、困りごとを相談に来られる方、市政への苦情・要望に来られる（電話）方など様々。市への要望・苦情はここでは扱わないことを伝え、『市長への手紙』を書くよう勧めた。

日々の事務所運営で特に心を碎いたのは、スタッフとして参加する人はすべてボランティアで、各自の都合のつく範囲での活動という点。「お手伝いします」と言って来られた方の気持ちに報いようと、その方が活動できる作業の準備と段取りを行った。

イベント等の開催にあたっては、利益供与にならぬよう、かと言つて赤字にもならぬよう細心の注意を払つた。加藤さんも運営スタッフも、全員同じ会費を払つての参加であった。スタッフによる旅行の下見も各自持ちで行った。



バス旅行の昼食後はクイズで大盛り上がり



ジャンケン大会で勝ち残ると自筆色紙をプレゼント



2019年のバス旅行にて1号車の集合写真

会報「風の谷だより」

2004年12月の準備号、05年1月の創刊号から2020年7月の88号まで発行した「風の谷だより」は、A3両面モノクロ印刷で二つ折りの会報であった。発行当初は主として、各地区の活動や他団体の情報を紹介し、2008年の初当選後には、徐々に加藤市政についての情報と会員交流のための記事へと移行していった。

漢字が多く一文が長い加藤さんの文章と併載するため、市政情報は写真や図を多用して分かりやすさを心がけた。またウェブ上で公開していた加藤さん執筆の「市長の日記」を、パソコンに親しみのない読者のために、抜粋・印刷して同封した。

200部程度から始まった会報は、5,000人にまで増えた会員(最終的には6,500余人)への郵送費を考え、会費納入者のみへの発送が検討されたが、会員自らの手配り案により会員全員にもれなく行き渡ることとなった。

事務所常駐メンバーが印刷と折り、封筒ラベルの準備をし、10～20人から成る「封入隊」へバトンタッチ。会報にイベントチラシ等を加え「手配り隊」へと引き継いだ。ピーク時で200人余りが奔走した手配り隊は、加藤さんが懇意にする首長たちに大変羨ましがられた。手配り隊メンバーの懇親

会では、加藤さんが日頃の労に感謝を述べ、隊員同士の近況報告が和やかに交わされていた。

手配り隊に浸透していた使命感

手配り隊長 野地 真代

総会員6千余名に対し、10年以上、年4～6回ペースで会報「風の谷だより」を配り続けたボランティア総勢200名以上の方々に、すでに鬼籍に入られた方々も含め、まずは深く感謝を申し上げます。

同時に熱いものがこみ上げてきます。はじめは、時間や体力に余裕がある方にと考えていましたが、実際には皆さま忙しく働いていて、夜間の配布や、体調の悪いのを無理して歩いて下さる方々のなんと多かったことか。

その原動力は、小田原から社会を良くしたい！それにはお金のかからない選挙を実現し、加藤さんにしがらみの無い市長として良い仕事をしてもらうために後押しが出来たら、という使命感のみだったと思います。

これぞ市民運動の礎、拓く力の生んだ宝ものでした。

これが「拓く力」なんです

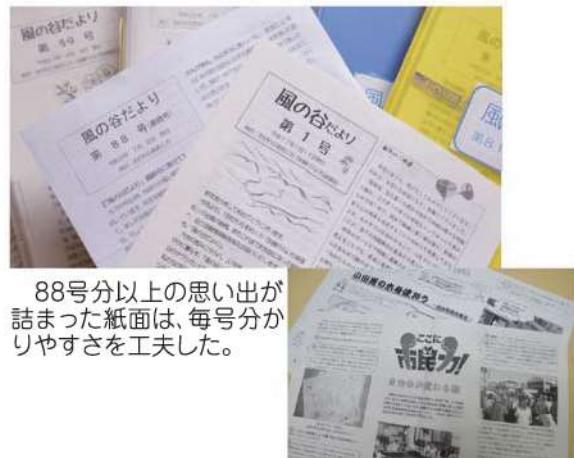
編集長 瀬戸 知子

「風の谷だより」は、もともと加藤さん自身が編集・発行していたものです。私が事務所に参加した2005年以前から、加藤さんは手本となる自治体があればどこにでも出かけて事例を学び、人脉を作っていました。

あるとき事務局会議で「こんなに忙しい加藤さんに『風の谷』の編集をさせておくのは間違っている」と発言すると、福井事務局長(当時)から「じゃ来月からアンタやって!!」と(苦笑)。

初当選後の総会で、会場から「郵送費が足りないなら自分たちで届けるから、全会員に『風の谷』を配ろう」と提言された横川康隆さんも、ご高齢をおして3期12年間手配りしてくださいました。

手配り隊長を買って出た野地さんは、知る限りの人に呼び掛けて、瞬く間に『隊』、と呼べるほどの人数を『手配り人』に仕立て上げ、さらに手配り人のいな



い空白地帯は、自身が手配りして回ってくれました。

それが「拓く力」なんです。こんなことをしたらいいんじゃないのか、と思った人が実際にやってしまっている。だから選挙の時にも、普段事務所に顔を出したこともない会員さんが地道にチラシ配りをしたり、知合いに加藤さんの良さを伝えたり。誰に頼まれたのでもない、自分の気持ちでやる運動が積み重ねられていました。

活動を支えた人たち

ここまで紹介してきた活動を実際に担ってきたのは、加藤さんの人柄に惹かれて集まってきた人々であった。はじめは「なにかお手伝いしましょうか?」から始まり、回を重ねるうちに熟達し、いつしか活動ごとの『プロ集団』が出来上がっていった。

しかし、機能別の組織が確立されていたわけではなく、声がかかれば、応じられる人が可能な時間に参加した。多くの人が複数の活動に参加した。

主だった活動のうち、事務局・選挙スタッフ・イベントスタッフ・会報『風の谷だより』の封入隊と手配り隊の活動内容を記す。



企画から実施まで工夫を凝らしたバス旅行や勉強会は、余念の無い準備のおかげで毎回好評だった。

イベントスタッフ

活動日	イベントの開催日
活動内容	イベントの企画・会場設営・受付・茶菓準備など
活動人数	約30人

選挙スタッフ

活動日	告示日1ヶ月くらい前から開票日まで
活動内容	
選挙事務所運営・うぐいす・電話かけ・街宣車ドライバー・ハガキ集計・チラシ配り・ポスター貼り・印刷物作成・集会運営	



事務局

活動日	月・水・金の午前10時～午後5時までオープン
活動内容	
総会・役員会・懇談会の準備や運営	
イベントの企画・準備・運営	
会報『風の谷だより』の発行	
来客接待・電話応対／名簿管理・会計	
各種チラシの作成／選対・選挙事務所のサポート	
ホームページ・メルマガ・メール管理	
マスコミ対応／祝電対応等	

活動人数

約10人が各自の都合のよい曜日・時間で

会報の封入隊

活動日	会報『風の谷だより』発行日(年4～5回)
活動内容	
発行物を揃える・封入する(初期の頃はA4を三つ折りにする作業と宛名シール貼りも)	
活動人数 最大25人程度	

手配り隊

活動日	会報『風の谷だより』発行後 各自の時間の都合に合わせて
活動内容	
会報を会員宅に直接届ける 市内全域をカバー	
活動人数 約200人	



この活動から派生して、苦労話や笑い話を共有する、隊員同士の交流会が催されるようになった。

役員紹介		2003	2004	2009	2010	2016	2020
代表	会長  飯田 和 2003～2010	副会長  二宮 秀夫 2010～2020	事務局長 野田 迅	福井 孝行		高梨 信之	石川 信雄
		事務局次長 福井 孝行	佐宗 謙一		今屋 健一	西側 恭二	
		会計 奥津 正司		奥津 敏正		瀬戸 知子	
						岩崎 敦吉	

第二章

「おだわらを拓く力」の選挙



2008年5月 選挙戦最終日、小田原駅前にて

2003年の創立から17年の間に、「おだわらを拓く力」は、加藤憲一さんとともに、5回の小田原市長選挙を戦った。

加藤さんは既成政党には属さず、市民派を貫いた。それゆえ、それを支えるべく集まった人々も、今まで選挙に携わった経験がない者がほとんどであったが、一人ひとりが、時間・知恵・スキルなど、できることを持ち寄り、それぞれの思い・情熱を一人でも多くの市民に伝導していくことに努めた。また、法令を順守すること、対立候補を誹謗中傷等でおとしめるようなネガティブキャンペーンは絶対におこなわないことは、会の方針として17年間貫かれた。それらは、選挙運動そのものを、自立した市民同士が手を携えて、ひとつの目標に向かっていくという「おだわらを拓く力」の理想を具体的に表現する場ととらえたからだ。

この章では、加藤さんと「おだわらを拓く力」の5回の選挙を振り返る。

2004年～2020年 選挙記録

2004年



○外的情勢 2003公選法改正により国政選挙で「マニフェスト」が配布可能になる。

○選挙概要 4選を狙う現職・小澤良明氏に新人・加藤憲一氏が挑戦。
投票日 2004年5月16日
候補者 小澤良明(60歳・市長)
加藤憲一(40歳)
争 点 お城通り再開発、地下街、
市民ホール建て替えの3大案件

○加藤陣営

選挙事務所 お城通り
スタッフ 選対本部長:福井孝行
副本部長:佐宗謙一
イメージカラー 紺(本人の好きな色の一つ+
冷静・知的等のイメージから)
キャッチコピー 「新しい風」
戦略・運動 若さのアピール
マニフェスト冊子

○結果 投票率:43.80%
得 票 (当)小澤良明 37,266
加藤憲一 31,244
マスコミ評価 加藤氏の善戦を伝える



2004年5月15日、マイク納め

2008年



○外的情勢 米大統領選の予備選からのオバマ旋風
2007選挙運動用ピラの新設
複数の公開討論会が実施

○選挙概要 元県議会議員の豊島氏、山田氏、2度目の挑戦の加藤氏、3人の新人による選挙。
投票日 2008年5月18日
候補者 加藤憲一(44歳)
山田文雄(60歳・元県議)
豊島輝慶(64歳・元県議)
争 点 お城通り再開発、地下街、
市民ホール建て替えの3大案件

○加藤陣営

選挙事務所 銀座通り・南街区
スタッフ 選対本部長:福井孝行
副本部長:安野裕子、稻毛秀雄
佐宗謙一
イメージカラー 紺
キャッチコピー 「チェンジの人」
「新しい小田原へ」
戦略・運動 働き盛り
JC主催の公開討論会が一つの潮目に

○結果 投票率:53.93%
得 票 (当)加藤憲一 44,108
豊島輝慶 29,382
山田文雄 12,852

理想への意志
若いエネルギー

小田原市長候補者
39歳 加藤けんいち

2008年の選挙ハガキ



2004年の選挙ハガキ



「おだわらを拓く力」の選挙費用

政治活動では、表に出ている金よりも裏で動いている金のほうが多いという話も聞くが、「おだわらを拓く力」には裏の金というものが全く無かった。すべての収支は総会で報告され、全会員に会報『風の谷だより』でお知らせした。

支出は、平年で4百万円ほど。選挙の費用は1千万円余りであった。収入のほとんどは一口千円の寄附。20万人都市の市長選挙は、実質1千万円余りで賄えるのだ！

一例として、加藤氏が初当選した2008年の収支を以下に示す。

○2008年 - 活動収支

収入		単位：円	
	政治活動	選挙運動 5/11～17	年間計
寄付	11,451,808	3,676,000	
行事参加費	1,263,200		
雑収入	54,045		
利息	3,242		
収入計	12,772,295	3,676,000	16,448,295

支出

	政治活動	選挙運動 5/11～17	年間計
事務所費	1,812,161	576,874	
公民館使用料	54,700	115,100	
広報・印刷費	990,208		
配送費	3,869,607		
広告宣伝費	4,222,688	639,321	
備品・消耗品	1,358,620	50,902	
行事費用	1,319,354		
雑費	290,616	65,137	
支出計	13,917,954	1,447,334	15,365,288

2012年



○外的情勢 民主党政権(2009.9～2011.8)
2011.3東日本大震災
防災意識の高まり

○選挙概要 2選目を狙う市長・加藤氏に対抗して、前市議の大野氏、鈴木氏が参戦。

投票日	2012年5月20日
候補者	加藤憲一(48歳・市長) 大野眞一(70歳・元市議) 鈴木美伸(60歳・元市議)
争点	地震・津波等の防災、地下街再生

○加藤陣営

選挙事務所	銀座通り・北街区
スタッフ	選対本部長:今屋健一 副本部長:金井俊典

イメージカラー	紺
キャッチコピー	「チェンジ実行中！」
戦略・運動	現職としての強み 実力派市長

○結果 投票率:41.87%

得票	(当)加藤憲一 41,818 大野眞一 19,010 鈴木美伸 4,951
----	---



2012年の選挙ハガキ

2016年



○外的情勢 2013ネット選挙解禁
選挙期間中の更新が可能になる。

○選挙概要 2期で実績を積み上げた加藤氏に
対し、対立候補者は現れず。

投票日 2016年5月15日

候補者 加藤憲一(52歳・市長)

○加藤陣営

選挙事務所 銀座通り(そびそ二宮ビル1階)

スタッフ 選対本部長:今屋健一
副本部長:福井孝行

イメージカラー 紺

キャッチコピー 「大きく育てよう、小田原の力。」

戦略・運動 選挙戦1日のみ
HP、ブログ、FB等の活用

○結果

得票 無投票

得票 (当)加藤憲一



2016年の選挙ハガキ



2020年の選挙ハガキ

2020年



○外的情勢 コロナ禍による市民の不安
地域経済の疲弊等
3密となる活動の制限

○選挙概要 4期目を目指す加藤氏の対抗馬として、
自民党系の元県議・守屋氏が出馬。

投票日 2020年5月17日

候補者 守屋輝彦 (53歳・元県議)
加藤憲一(56歳・市長)

争点 コロナ対策(医療・経済・生活)
市立病院の建て替え

○加藤陣営

選挙事務所 銀座通り(オーピックビル)

スタッフ 選対本部長:今屋健一
副本部長:福井孝行

イメージカラー 紺

キャッチコピー 「歩みは止めない」

戦略・運動 市長の公務を優先
討論会等の中止
HP、ブログ、FB等の活用

○結果

投票率:46.79%

得票 (当)守屋輝彦 37,245
加藤憲一 36,701

マスコミ評価 選挙後、守屋氏の選挙公報の
記載が問題となり、新聞・TV
等で連日報道される事態に



コロナ禍中での選挙はマスクに
グータッチと、いつもと異なる光景

証言集 わたしと選挙

小田原愛に涙

2020年選挙スタッフ 安達 優子

加藤さんは、私が所属するフラダンスサークルの発表会に来てくださったり、市内のイベントでは生徒たちに優しい言葉をかけてくださったり、その温かいお人柄のファンでした。雲の上のような存在の加藤さんでしたが、大村 学スタッフとして、2020年市長選のお手伝いをさせていただきました。

選挙期間中は選挙カーで一緒にさせていただき、加藤さんの小田原への思いに何度も涙が溢れました。選挙カーの看板作り、SNSの動画制作、演説のLIVE配信。初めての経験も多く、緊張感溢れるめまぐるしい数ヶ月でしたが、素晴らしいご縁に恵まれ、加藤さんには感謝の気持ちでいっぱいです。この出会いへの感謝を忘れず、「愛すべきふるさと 小田原」で暮らしていきたいと思います。

富士山の麓の勝手連

富士宮市議会議員 深澤 竜介

2008年5月17日小田原市長選挙最終日、小田原三角公園の熱気を忘れることができません。「まちをつくるのは、市民1人1人です。小田原の可能性を広げよう！」加藤憲一が語ると、大きなうねりが沸き起こりました。市民ボランティアの手作り選挙が小田原を動かした瞬間です。

私は小田原市民ではありませんし、加藤憲一さんは縁も所縁もありません。しがらみなく、徒手空拳で市長選に挑む男がいることを知り、2004年3月に二宮ビルを訪ねた勝手連です。

柏山駅前的小田原百貨店で、一緒に街頭演説してから16年。加藤さんは、全く変わりません。常に理想を掲げ、市民と向き合ってきました。良い意味で政治家らしくなく、頑固です。スタッフからいつも言われる話の長いところ、丸首のTシャツが似合わないところを含めて加藤憲一は加藤憲一です。市長であろうがなかろうが、私は生涯、加藤憲一勝手連です。

赤いエプロンの「お勝手連」

元「Powers!」編集長 小野田 明子

普通のおばさんが選挙に関わるには、高い壁がある。なのになぜ選挙運動に参加したかといえば、大きくは、理想社会への実現、市民参加の自治という目標があったから。小さくは、当時の小泉政権時でのグローバル社会への転換への危惧、小田原市の独断的自治の手法に対する義憤が重なっていたからだ。

自由な発想で街づくりしていた岩瀬照子（故人）を先頭に、私たちは「お勝手連」を結成し、赤いエプロンをつけて街宣車に乗った。応援団が、市民一人ひとりが政治に関わることの大切さを選挙運動で語ったことは、小田原市長選挙では初めてのことではなかったか。それが、時間の経過と共にじりじりと自民党に押し返された。今でも、私の加藤さんへの信頼は、ゆらぐことはない。心配なのは、日本であり、小田原だ。

私とカトケン選挙

2012年～選対本部長 今屋 健一

「小田原の明るい未来のため、今より更に街を良い形にして、次代を担う子ども達に引き継ぐ」との思いで、17年前に私の選挙活動がスタートした。この選挙の特徴は「市民活動の延長線上にある」と言うことだった。そのため普段から携わっていた地域のボランティア活動のなりで活動していたが、そこは少し違っていた。しっかりと結果が求められる。市長に当選させる重責があった。集まってくれるメンバーもそのことを承知していて、常に真剣に向かっていた。ゆえに意見の食い違いなどで口論になってしまうことや、結果が出せるか不安で眠れない夜も多々あった。この経験から得られた仲間との信頼関係は私の財産だ。これはどんなに望んでも簡単には得られない貴重な絆。

私はこれからもこの絆を大切に、そして「おだわらを拓く力」のメンバーであったことを誇りに、これまで通り「小田原の明るい未来のため」歩みを止めず進んでいきたい。

応援の思いは行動で

事務局スタッフ 山室 万里子

加藤さんとの初対面は約19年前。その時彼はテナントビルの管理人だった。そこから3年後に、まさか小田原市長選挙と一緒に迎えることになるとは。『100%ボランティア』の活動は、寄付でしか活動費を得ることが難しい。そのため、最初のうちは週1回のスタッフ会議の際に500円の参加費を設定し、それを活動費に充てていた。

寄付は現金だけのことではない。交通費も昼食代も全て自費。スタッフはもちろん、応援してくれている皆さんの行動そのものが寄付だ。こんなに素晴らしい活動が17年という長い間やってこられたこと、最初から携われたこと、支えて下さった沢山の方々との出会いが私にとって何よりの財産だ。そしてその種を撒いて下さった加藤さんに感謝したい。

市民派選挙の『お父さん、役

2020年選挙スタッフ 内田 福太郎

2020年5月17日、544票差と言う稀に見る僅差で加藤さんは落選。非常に残念な結果だったと思います。もっとああしていれば、こうしていればと『タラレバ』を言ったらキリがありません。

私は衆議院議員、首長、地方と様々な選挙に携わらせていただいているが、加藤さんの選挙はその中でも群を抜いて市民派選挙。集まって来るみなさんが家族のような素晴らしい人間関係の中で、加藤さんはまるでみんなのお父さんのようにおおらかで、温かく、まさに自らが先頭に立って引っ張っていく姿に、私は毎日感動させられっぱなしでした。

最後の選挙を皆さんと一緒に戦えた誇りを胸に、我々も前を向いて歩いていきます。

第三章

「おだわらを拓く力」の 原動力



「おだわらを拓く力」は政治的思想を一にする者が集まった政治団体ではない。各会員の年齢層や職業、その背景もさまざまで、例えば支持する国政政党すらもまったくバラバラという集まりであった。

ただ、そこに共通点を見出すとすれば、自分たちの暮らす街のより良い未来のために、加藤憲一さんという人間が提示した街の未来図に共感し、それを実現すべく、ともに行動することを選んだということかも知れない。

ここでは、「おだわらを拓く力」の活動の原動力となった加藤憲一さんに焦点を当て、加藤さんを知るさまざまな人たちの証言を通して、その人物像を探る。

おだわらを拓く力

証言集 加藤憲一さんというひと

気を寄せるエネルギー

林野庁(当時は、小田原市役所経済部管理監) 永井 壮茂

2011年の3.11東日本大震災直後の4月、林野庁から小田原市農政課に着任した私に、「小田原をかつてのような『木のまち』にしたい」と熱く語る加藤市長の真剣なまなざしは、今も忘れません。その想いは、森林・林業、木工、匠の方々の心を突き動かし、まさしく二宮尊徳翁の「一円融合」、小田原・箱根の「よせぎ」のごとく、そこに集う多くの方々のツナガリをも生みました。小田原城天守、報徳二宮神社の大鳥居、学校、市役所等公共施設をはじめ、小田原の街並みにおける木づかいの広がりを、誰が想像していたでしょうか!

加藤市長により蒔かれた種からの芽生えは、まさに今、小田原の自立した志民活動の中心として大きく成長し、今後、全国の地域のモデルとなっていくことを確信しています。

いつまでも変わらぬ人間力で

元会計 奥津 正司

思えば彼は、学生時代から夜を徹して天下国家を論じるような男でした。時には我儘も言うしスネたりもする普通の人間ですが、当時から度量の大きさや人間力の高さは突出していましたね。だから初めて「市長を目指す」と聞いた時も彼なら出来ると私は確信し、彼の素晴らしいところでも多くの人に知ってもらう活動をしてきましたつもりです。

たくさんのエピソードの中で特に凄いと感じているのは、一度でも彼に直接会って話した人はほぼ例外なく彼のことを好きになってくれた事。彼の人間力のなせる業でしょう。そして素晴らしい男のもとには多くの素晴らしい人が集い、その出会いは私にとっても財産になっています。今は一市民に戻った彼が次に何を成すのか、楽しみでなりません。

商店街視察のアフター5

縁一番街商店会 会長 平井 義人

彼とは約20年前に富山のフリークポケット視察に参加したことが出会いでした。その後、毎年テーマを絞って、大阪ミナミ・川越蔵のまち・小布施・八戸三六横丁など1泊で地元の仕掛け人の方と時間をかけて話し合い、小田原での街づくりの構想を練っていました。

アフター5は、横丁・路地を探索するのが好きらしく、意外な店を見出し、地元の女将さんと仲良くなる一面があり、話のなかでご縁がみつかることもしばしばでした。お酒はイケる口なので、延々と話し合っていた印象で、私のほうが先に宿に帰るパターンでした。30代で若かったこともありますが(?)市長選への出馬も研修後の上野の飲み屋で聞いて、驚いたことを覚えています。

大好きな小田原のために

小田原市前副市長 時田 光章

小田原市が運営する自治体シンクタンク・政策総合研究所の市民研究員に応募して来た加藤さん。「小田原は可能性の大地である」とした論文は、小田原を知悉しまちづくりへの熱い想いが伝わる内容で、満票の合格でした。2008年5月、加藤さんは44歳で小田原市長に着任。長期的な視点で小田原の将来の在り様をイメージした大きな方針を示し、職員によく考えさせ、結果的に市民に有益な事業に仕上がった時には、喜びを露わにする人でした。職員をとても大切にし、職員からも敬愛されていました。

2020年5月、彼は一市民として市民協働の輪の中に帰ってきました。ともに皆が大好きな小田原のために、一歩ずつ進みたいと思います。

このまちを愛してやまない人。

芦子小PTA 谷津地区OG 福田 ひろみ

大地を耕す人。学び舎に光を照らし風を通す人。地域の子どもたちの心を育む人。まちづくり、またおなじ地区に暮らす住民として、PTAや子供会、地域の親の会でも活動を共にしました。当時、志を持ち寄り、加藤さんと共に歩んだひとりひとりがまちを変えていくと信じました。号令下ではなく、其々がその個性を活かすチカラとなって、笑顔を絶やさない協働の地域づくりを自然に実践できたのは、加藤さんの静かなリーダーシップの寄り添いがあったからこそ、ということに気づいたのはずっと後になってからでした。

「市長」になりたい人ではなく、「愛するまちを住み良くしたい」人。出会って以来20年、一点の曇りもないひたむきな自治の人であります。

熱量

おだわらを拓ぐ力 初期メンバー 藤沢 泉

加藤さんの出会いは2003年5月。あるビルの中のソーホー向けスペースを一室お借りしようかと連絡したところ、現れた背の高い優しそうな方。それが加藤さんでした。「何かお困りのことはありませんか?何なりとおっしゃってくださいね」と、いつも紳士的で非常に美しい日本語を使われることが印象的でした。ある日、その加藤さんが市長選に出るという噂を聞き、まさかあの物静かな方が?何かに巻き込まれて?と心配してお訪ねしたところ「僕はやります。もうこれ以上小田原をまかせておけない!」と口を真一文字に結ばれた。その表情を見たら「私も出来ることします!」とその足で走って友達に伝えに行った。

人を突き動かす熱量、今も鮮やかに思い出せます。

座談会「おだわらを拓く力」に 注いだ熱いおもい—

2003年11月の発足から2020年7月の解散まで17年間にわたり、会員と加藤さんを、また会員同士を繋ぎ、活動の核となっていた事務局。そのスタッフとして、内側から組織を支えた5人が、「おだわらを拓く力」という組織と、そこに身を置いた自身の活動を振り返る。

——最初に、加藤さんとの出会いや活動に参加するようになったきっかけを教えてください。

福井 加藤さんがオービックビル（小田原市内の商業ビル）の事務局長時代、仕事の打合せの合間にお茶を飲みながら、「自分が市長になったらどう思うか」と問われた。「いいんじゃないですか？」と気軽に答えたらその後出馬の決意を打ち明けられ、事務局をやってくれ、と。日中は仕事があるし出来ないと3回断った。1度断ってもそれまでのやりとりはなかったかのようにリセットされて、またお声がけいただいて（笑）。4回目には確かに家に来た。知り合ってまだ間無しだったし、どうして自分に、って。

佐宗 私は高校時代に遡ります。1年で山岳部に入部したとき加藤さんは3年、生徒会長でなつかつ全国大会出場メンバー、と雲の上の人でした。男子部員15、6人に対して8人（！）いた女子マネージャー全員が加藤さんファンでしたね。秋の丹沢登山のこと。バテ気味の女子部員たちを励ましながら登っていくと、山頂のベンチで本を読みながら待つ加藤さんの姿が！サプライズの登場に女子は途端に元気に。そんな出会いでした。

卒業後もOB会等で何度か顔を合わせていて、最初の選挙の1年ほど前に加藤さんを訪ねた際、「来年の市長選に出ようと思っている。その時は手伝ってくれる？」と聞かれて。2003年11月に新聞で出馬表明を知り連絡したら「早速だけど次の会議に出て！」となり、最初はほんのお手伝いのつもりが、選挙が終わる頃には選対副本部長かつ出納責任者になっていました。

今屋 出会いは20年以上前の田んぼ。当時僕は32歳で憲さんが33歳だった。日焼けした顔でニコニコしていて、今と変わらない穏やかな感じで。田んぼでは、選挙だの出馬だのそんな話はしなかった。大事な話があるからって喜久水（支援者の家族が営む居酒屋）に行ったら「選挙に出ます」と発表があって。僕は「田んぼはどうするんだ！」って怒ってね（笑）。田んぼは引き継いで、選挙も手伝うことになりここまで來た。

西側 私は2008年の選挙からの参加。当時は「おだわらを拓く力」を全然知らなかった。最後の勤務先の小学校教頭時代に加藤さんがPTA会長になって接する機会が増え、あることで1、2時間議論をした時に、人の話をしっかり聴ける人だなあと感じたんです。3月に定年退職して、「これからなにをやろうか」とのんびり考えていた時、加藤さんにたまたま連絡したら決起集会に誘われて。5月に無事に当選したから次のことへ移ろうかなと思っていた矢先、「拓く力」の重鎮・稻毛秀雄さんから事務局長を打診されてビックリ！その後加藤さんと話をして、引き受けることになった。

瀬戸 市外から転入した私は、加藤さんという人を全く知らないで

「おだわらを拓く力」に参加した。大人が知らない街に引っ越してきた場合、人脈が全然ない。そんなとき自宅のポストに入っていた「Powers！」を見て、そこに書かれていた加藤さんの考えに感銘を受けた。誌面上に「ボランティア募集」の文言を見付けて事務局を訪ねたのが始まり。初当選までは加藤さんも事務所にいて、昼食のお弁当のご飯を半分あげたり……。とても頭が良くて、先が見え、まっすぐで清廉な人柄の加藤さんという人をじかに知り得たことが、その後の活動の原動力になったと思う。

——「おだわらを拓く力」という組織の魅力とは。印象深かったことなどありますか。

瀬戸 政治団体というのは利権とかお金で動いている人たちが圧倒的に多いのに、ここでは皆が自発的に、街の未来を考えて参加していることに特異性を感じた。そしてこれが民主主義の本来のあり方だ、とも。小田原の前は東京、京都、千葉という大都市で生活していて、選挙といえばポスターで候補者を選ぶ程度の関心しかなかった。小田原に来て市政に興味を持ち、初めて政治というものが「自分ごと」になりました。

福井 僕は最初の選挙の時に会議の出席者から、「君は事務局なんだから5,000票集めて来い。企業を回ってお金を集めて来い」と言われて「出来るか！」って（笑）。発足から当選までの時期を最も深く関わって、選挙といえばしんどいことばかり。楽しいなんて感じたことは一度もない。事務局長、選対本部長を兼務していた自分に求められていたのは全体のまとめ役と進捗管理。その頃は関係者の中で一番年下だった自分が大役を任せ、周りの方たちが立ててくれて機能していた、フラットな組織だったんだなと思う。告示されると不思議なくらい毎日どんどん人が集ってきて、各々の役割を果たしていたのは、「おだわらを拓く力」の理念をまさに体現していたと思う。

瀬戸 残ったのは『フラットな組織、を理解できる人ばかりだった、ということでもあるよね。

佐宗 風通しの良さというのはありましたね。あとは集まってる人たちがいい人ばかりだった！ギラギラした人がいなかつたというか。

西側 最初の頃は、事務局は報酬をもらっていると当たり前のように思っていた。もらっていないと分かると「それではダメだ。続かない。出さなくては」と何度も言われた。その意識を変えるのに、2年くらいかかる（笑）。私はそもそも事務局長を引き受けたときに、平時の事務局を守ることはできるけど選挙のことは出来ません、と断りを入れていた。選挙の時は、それが得意な人たちが自主的に集まって頑張ってくれる、という体制が出来ていて。



今屋 健一(55)
2010～2020年に
後援会副会長を務める



福井 孝行(53)
2004～2009年に
事務局長を務める



佐宗 謙一(53)
2004～2009年に
事務局次長を務める



西側 恭二(73)
2009～2020年に
事務局長を務める



瀬戸 知子(70)
2009～2020年に
事務局次長を務める

今屋 僕は西側さんと逆で、日々の後援会活動は事務局に任せっきり。選挙が近づくと仕事そっちのけで「やるぞ！」となる。見返りのない選挙でしたよね。自分ができることを精一杯やり、誰もそれを主張しない。思えば僕たちは、同じ方向を目指している憲さんの掲げた公約の実現が見たかっただけなんだな。

佐宗 加藤さんが「口先だけの人より、ともに汗をかいてくれる人を信用する」と話しているのをきました。以来、行動第一という指針が、自分の中にも会の中にも生まれたと思います。例えばポスティングや駅立ちなど、事務局として人にお願いをするなら、まず、自分たちが率先して、と心がけていました。

——「おだわらを拓く力」での活動が、ご自身の行動や思想等にもたらした変化はありますか。

今屋 選挙に関わったことで自分の理想が具体化した。人口減少とか少子高齢化とか、地域の問題と解決策が課題としてはっきり見えたから、自治会長をやっていてもやりがいを感じて面白かった。

憲さんとの会話がきっかけで、「地域にいたい」という思いが確信に変わり、自営業を決意した。目指している方向が同じ彼が、私たちの思っていることをいつもうまく言葉にしてくれていたんだな。

西側 私は退職したら日本中を旅行したかったけど、みごとに流れましたね(笑)。代わりに、ではないけれど事務局に入って本当にたくさんの人と出会った。事務所ではいつも「教育(今日行くところ)と教養(今日の用事)」を合い言葉に、皆さんと情報交換をしたり、自治会で配布する通信の校正をしてもらったり、いろいろ勉強になりました。

瀬戸 福井さんと佐宗さんの事務局時代は、現役で働いている人たちが会の中心。当選後の事務所は、定年して時間に余裕のある人たちが集まるサロンのような雰囲気だった。私みたいに小田原を知らない人間はそこで、森川里海があり富士山を望む住環境の良さや100年、1000年単位のなりわいがある小田原の素晴らしい学んだと思う。

福井 加藤さんの最初の選挙のとき僕は30代。それまで小手先で人生をやり過ごしてきたと自分で感じていた。40歳の時に父が倒れて、介護に費やす時間が増えた。2回目の選挙まであと1年、まだ体制を立て直すことができると思い、事務局長の降板を申し出た。加藤さんは「時々顔を出してくれるだけでいい」と、事務局次長の佐宗さんからは「介護を手伝う」と言われて。肩肘張ってでも続けなきや、と腹をくくれたことを覚えている。加藤さんに会って、選挙に関わって、いろいろな人とも出会って、世の中には『本物』や『強者』がたくさんいることに気づかされたことは大きかったし、本気

で正対しないと通用しないことを知った。

佐宗 後援会で役割を与えられ、市長を誕生させるという成功体験ができたことは自信にもなったし誇りです。あとはたくさんの人とのつながりが宝物。私事ながら5年前に結婚して、ここにいる皆さんに列席いただいた披露宴で、思い出を写真で振り返る映像を流したのですが、見終わった後、加藤さんが「ほほ私が絡んでますね」と。たしかに山岳部、後援会、商店街活動と、加藤さんと一緒に写真は多かったです、ちょっとムッとした(笑)。

——苦楽の思い出は尽きませんが、改めて「おだわらを拓く力」での活動を振り返りつつ締めくくりを。

今屋 「おだわらを拓く力」という組織名が誕生したとき、同時に多発的に、いろいろな人たちが小田原で動き出すイメージを思い描いた。市民一人ひとりが小田原を拓く力となり、この街を良くしよう、と17年前に願ったことが現実になったんだな、と感慨深い。落選という結果ではあったけれど歩みは止まらないと確信している。トップに加藤さんはいないけれど、その動きを絶やさないように行動しようと思う。

西側 加藤さんという希有な人に出会い、時間と空間を共有できたら素晴らしいなという気持ちがあったから、私は第二の人生がここで活動で全うされて悔いないです。

今は、一市民活動団体としてこの過程と功績を多くの人に知ってもらい、これを糧に更なる広がりを見せる事を願っています。これからは、自分が地域でできることを探っていきたいですね。

佐宗 この17年間で鬼籍に入られた方も含め、ここで得られた皆さんとのつながりが本当に有り難かった。「おだわらを拓く力」としての活動は終わりますが、この絆は持ち続けていきたいなと思います。

瀬戸 実現が無理だろうと言われるほどに民主的な、理想的なチームがここにあった。そこに自分が参画していたことを誇りに思う。加藤さんが落選したときは本当に大きなショックだったけれど、今の、真っ黒に日焼けして土を耕し、精力的に動いている姿を見られるのは喜びもある。今後の加藤さんの活躍を楽しみにしています。

福井 普通の青年が志を立てて市長になり、その後12年ものあいだ職を全うする姿を間近で見られ、また一緒に活動できたことは、すごく貴重な経験をさせてもらったと思う。いろいろなところに加藤さんと「おだわらを拓く力」が蒔いた種が育っていて、いつかまた何かできるんじゃないかという気がする。日常の中で自分なりに研鑽を重ねて、そのときに応えられる自分でいたいと思います。

「全国で一番尊敬する市長は、加藤憲一さん」

前横須賀市長 吉田 雄人

横須賀市長在任中、注目している市長は誰か、とたびたび質問されました。答えはいつも決まっていて、「全国で一番尊敬する、小田原の加藤憲一市長」でした。ご本人の前でも公言しており、そういう時、加藤さんは少し困ったようにはにかんでいました。

そう答える、3つの理由があります。まず、市政運営の軸足を徹底して市民に置いた点です。市長就任とともに取りかかったまちづくりの全体像「おだわらTRYプラン」と、まちづくりのルールの「自治基本条例」は、中身もその策定方法も、市民と行政が同じ目線に立って議論する、当時としては画期的な取組でした。また26ある自治会連合会地区全てに地域まちづくり組織を立ち上げることができたのは、市民の底力を信じればそこだと思います。

二つ目は、つねに小田原の将来を見据えていた点です。残念ながら「建て替え」が政治問題化してしまった市立病院も、実は加藤さんの就任前は赤字の垂れ流しでした。それを1期目の4年間で黒字化させたことで、「質」や「あり方」の議論ができるようになりました。また市の財政を見ても、就任前に1,492億円あった市債

(借金)が、直近の公開データ(平成30年度末)で1,082億円に減っています。

そして基金(貯金)は15億円から61億円に増えました。お金を使わないという批判もあったようですが、全ては小田原の10年20年先を見据えていたからこそ。目の前の「ひとり10万円」のためではないのです。

そして最後に、清廉潔白なお人柄です。公務の随行職員に気配りを忘れない姿を、選挙運動中にスタッフへお声掛けしている姿を、新聞で取り上げられた小田原での素晴らしい取組を「市民のおかげ」と謙遜する姿を、私は見てきました。そのどれもが誠実で私利私欲無く、思いやりにあふれた姿で、それでいて人なつこい加藤さんの魅力そのものでした。

加藤さんが市民の皆さんと歩んでこられた道のりは意義深いものです。きっとこれから日本の地方自治の歴史にも、加藤さんの描いた軌跡は小田原市の名とともに色濃く残り続けるに違いありません。



「たとえ市長でも、農夫でも」

慶應義塾大学 経済学部教授 井手 英策

加藤市長と運命を共にします——いまから三年ほど前、僕が憲一さんとこう約束したのは、小田原駅西口の「太へい」という小さな居酒屋でした。

僕がここまで決意を固めたきっかけは、「生活保護ジャンパー事件」でした。そう、市の職員さんが「保護なめんな」「不正受給は人間のクズ」とローマ字で書かれたジャンパーを着用して、生活保護利用者宅を十年近くにわたって訪問していたというあの事件です。

僕はこの事件をニュースで見たとき、心底、落胆しました。でも絶望は何も生みません。全国の生保行政の専門家たちに連絡をし、僕は急いで秘書課に対処策を送りました。

翌日、担当の方から、「市長は先生と同じお考えです」と連絡があり、憲一さんが幹部職員、担当課職員にむけて行った訓示を送ってくださいました。

そこにはこう書いてありました。

「憎むべきは格差社会や分断社会、貧困化への流れである」

「私たちは、今回のこと、他部局のこととしてやり過ごしてはならない」

専門家が助言する必要など皆無でした。もっとも重要なポイントを憲一さんは押さえ、しかも、そのメッセー

ジを自らの手ですべて書き切っていました。こんな市長がいるんだ、と、僕は感動し、震えました。

すぐに事件を検討する会議が設置されました。元生活保護利用者をメンバーとする画期的な人選でした。しかも、全庁をあげてこの課題に取り組む態度をハッキリと示し、あらゆる情報を驚くようなスピードで開示していました。これらはすべて憲一さんのリーダーシップによるものでした。その結果、当初は「福祉不毛地帯」とまで言わされた小田原の生活保護行政でしたが、いまでは日弁連から表彰されるまでになりました。

憲一さんと運命をともにする。みなさんは何を大げさな、と思うかもしれません。でも、こんな得がたい経験をした僕には、とても自然なことだったのです。

いま、憲一さんは、真っ黒に日焼けしながら農作業をやっています。でも、彼なら何をやっても小田原を動かし、変えていくでしょう。市長か、農夫か、そんなことはどうでもよいのです。僕は憲一さんと小田原のためにできることを考え、実行します。歩みは止めません。みなさんとともに。



歩みは止まらない

前小田原市長 加藤憲一



「この国に『拓く力』という稀有な活動があったことを、キチンと記録にとどめ後世に遺したいのです。」事務局長として長年ご苦労をかけた西側さんからの思いがけないその言葉で、この冊子の製作は始まりました。菅原裕さんの編集統括のもと事務局経験者らが作業を重ね、関係者の声や過去の資料などがギッシリ盛り込まれた紙面には、「拓く力」の歩みがいかに「誠実」であったか、それがどれだけ多くの皆さんに支えられていたかが記されています。改めて、感謝の念に堪えません。

人生の様々な局面で多くの人に助けられ支えられ、様々ななりわいの現場や市民活動に身を置いて来た私にとって、市政運営もまちづくりも、市民の皆さんと同じ目線と感覚で、共に力を合わせ、喜びも苦しみも分かち合いながら歩むことが大原則でした。常々、「私は市長の役割を果たすが、皆さんは一人ひとりが『拓く力』であり、それぞれの分野で活動を！」と、会員の皆さんに申し上げてきましたが、3期12年に具現化した数々の成果は、まさに私たちのそうした実践の賜物。私の想定を遥かに越えて発揮された様々な「力」に、私は何度も「人の力は凄い！」と唸らされたことでしょう。

この冊子に記された歩みはその一断面に過ぎず、思い起こせば数限りないシーンが目に浮かびます。仕上げのステージを市長として担えなかつたことは残念ですが、私も含む「拓く力」が文字通り切り拓いた道は、後に続く多くの人たちによって確実に踏み固められつつあります。組織としては解散し、私も小田原市長ではなくなりましたが、「持続可能な地域社会」を目指す私たちの歩みと絆は、小田原という行政区の垣根を越え、より自由かつ伸びやかに繋がり合い、進化していくことでしょう。

「歴史の峠」と言われるこれから時代と社会では、これまで経験したことのない難しい状況が私たちを待ち受けています。その克服に必要なのは、2020年の市長選で掲げたとおり、「皆がいつまでも笑顔で暮らせる、愛すべきふるさと」を創り守るためにの智慧であり、実践であり、それを皆で担い合う絆だと確信しています。歩みを止めるわけにはいきません。なぜなら、「拓く力」の真価はまさにこれから問われるのですから。

「人の力」を信じ、手を携えて困難を乗り越えようとする人たちが、「拓く力」の歩みから少しでも希望と勇気を得て頂けたら幸いです。

第四章 「おだわらを拓く力」の軌跡

年	月	「おだわらを拓く力」の出来事	
2003 (H15)	11	16日、「おだわらを拓く力(加藤けんいち後援会)」設立 同日、事務所開き（オービックビル2階） 19日、加藤憲一氏が小田原市長選へ出馬表明	
2004 (H16)	1	辻立ち・駅立ちがスタート 体験型イベント「小田原の夢を語る集い」開催	
	4	マニフェスト冊子「未来への政策デザイン」発行	
	5	イベント「小田原を風の谷にしたい」開催 (決起集会、上映会、シンポジウム、コンサート等)	
	16日	小田原市長選挙。現職に挑戦するも約6,000票差で落選	
	6	24日、「おだわらを拓く力」解散式	
	7	10日、2回目の選挙へ向けた再起の決意表明として「会員の集い」を開催。「新生・おだわらを拓く力」再結成	
	8	「おだわらを拓く力」の事務所を加藤氏自宅からそびぞ二宮ビル2階へ移転	
	11	市内各地域で地域懇談会（ミニ集会）を開始	
	12	機関紙「Powers！」創刊準備号を発刊 会報「拓く力通信」準備号を発刊	
2005 (H17)	1	会報「風の谷だより」第1号を発行	
	7	新潟県山古志村へ中越地震被災地視察・交流ツアーを実施	
2006 (H18)	11	第1回バス旅行で山梨へ（旅行は以後も継続）	
	4	「折り梅」上映会＆シンポジウム 小田原市北部地区まち歩き（以後、各地区ごとに独自の催しを開催）	
	7	講演会「あしがら平野の先人たちに学ぼう」開催	
	9	加藤氏の欧州視察報告会として「欧州の持続可能な地域づくり」開催	
2007 (H19)	11	講演会「南ドイツ・フライブルク地域からの報告」	
	7	あしがら総研主催「第1回小田原再生フォーラム」開催に協力	
2008 (H20)	5	加藤氏が小田原市長選に初当選、1期目スタート	
	10	地区別ミーティング（市政報告・ヒアリング）始まる	
2009 (H21)	1	新春の集い・「伊藤京子さんのピアノトーク」「風の谷だより」手配り隊が発足	
	9	上映会「いのちの作法」	
			小田原再生フォーラムのテーマとゲスト (2007年7月～2008年2月に全8回実施) 第1回 テーマ「地域経済」 ゲスト：元産業再生機構代表取締役専務 兼業務執行最高責任者 富山 和彦氏 第2回 テーマ「医療・福祉」 『終わりよければすべてよし』上映会 第3回 テーマ「文化」 ゲスト：新潟県魚沼市小出郷文化会館館長 桜井 俊幸氏 第4回 テーマ「まちづくり」 ゲスト：長野県小布施町町長 市村 良三氏 第5回 テーマ「環境・食糧・エネルギー」 ゲスト：岩手県葛巻町元町長 遠藤 治夫氏 第6回 テーマ「市民力」 ゲスト：元株式会社まちづくり三鷹 事業部プロジェクトマネージャー 関 幸子氏 第7回 テーマ「教育」 ゲスト：鎌倉てらこや理事長 早稲田大学社会学部教授 池田 雅之氏 第8回 テーマ「循環型社会」 ゲスト：山形県長井市レインボープラン 菅野 芳秀氏 徳島県上勝町ゼロ・ウェイスト・ アカデミー 松岡 夏子氏 ※ゲストの肩書きは全て開催当時のもの
			市政の実績
			1期目
			<ul style="list-style-type: none"> ・自治基本条例制定 ・第5次おだわらTRY プラン策定 ・東日本大震災の被災地へ市民ボランティア派遣 ・東日本大震災の被災地へ小田原市職員を派遣

年	月	「おだわらを拓く力」の出来事	市政の実績
2010 (H22)	3	上映会「1000年の山古志」	・「脱原発をめざす首長会議」に加盟
	6	マニフェスト進捗状況評価報告会として「マニフェスター2010」開催	・資源循環と環境美化に取組む「段ボールコンポスト」
	9	講演会「生ごみは宝だ」 ゲスト:吉田俊道氏	・お城通り地区再開発事業に着手
2011 (H23)	2	手配り隊交流会	・市内26の連合自治会で「地域別計画」を策定
	6	講演会「東日本大震災から学ぶ」 ゲスト:福島県相馬市長 立谷秀清氏	・森林・林業・木材産業活性化協議会を設立
	10	座談会「わっしょい！小田原」	・北条五代観光推進協議会を設立
			・無尽蔵プロジェクトの開始
			・神奈川県西部広域行政協議会を設置
			・行財政改革
2012 (H24)	5	加藤氏が小田原市長選に当選、2期目がスタート	2期目
2013 (H25)	2	全15回にわたる勉強会始まる(P11参照)	・おだわら自然楽校の開校
	8	「風の谷だより」封入隊・手配り隊・役員交流会	・小田原市環境基本計画改訂版を策定
2015 (H27)	7	現地勉強会始まる（小田原漁港）	・身近な公園プロデュース事業がスタート
	10	現地勉強会（いこいの森）	・全市いっせい総合防災訓練の実施
	12	手配り隊交流会	・終戦70年の節目に市内中学生を広島へ派遣
			・小田原の魚ブランド化・消費拡大協議会設立
			・小田原市歴史的風致維持向上計画の認定
			・小田原城天守閣の耐震補強事業とリニューアルオープン
			・小田原地下街再生事業の集大成「HaRuNe小田原」オープン
2016 (H28)	5	加藤氏が小田原市長選に無投票で当選、3期目がスタート	3期目
	9	現地勉強会（小田原城）	・おだわら環境市民ネットワーク立ち上げ
2017 (H29)	2	現地勉強会（環境事業センター）	・環境課題解決を目指す「寄気」事業
	9	現地勉強会（城山陸上競技場と白秋童謡の散歩道）	・国の「生涯現役促進地域連携事業」に採択
	12	上映会「ケアン」	・おだわら市民学校の開設
2018 (H30)	7	手配り隊交流会	・熊本地震の被災地へ小田原市職員を派遣
	10	現地勉強会（小田原文学館）	・生活保護ジャンパー問題を受け「生活保護行政のあり方検討委員会」を設置
2019 (H31/ R1)	8	SDGs 勉強会	・「おだわら森林ビジョン」策定開始
2020 (R2)	5	加藤氏が小田原市長選で落選	・漁港の駅TOTOCO小田原オープン
	7	会報「風の谷だより」88号(最終号)発行 「おだわらを拓く力」解散	・ラグビーW杯でオーストラリア代表のキャンプ誘致を実現
			・小田原市民会館の後継施設「小田原市民ホール(三の丸ホール)」着工
			・小田原市斎場の整備
			・「SDGs未来都市」と「自治体SDGsモデル事業」の認定
			・環境省から「地域循環共生圏」認定

「おだわらを拓く力」と加藤憲一氏の活動をもっと知りたい方へ

- 2003年～2020年の「おだわらを拓く力」の活動は☞<https://www.katoken.info/>
- 加藤氏の市長としての実績は冊子『12年の歩み』にまとめられています。
(上記webサイトで閲覧可能)
- 市長退任後の加藤憲一氏の活動については☞[Facebookページ「加藤憲一」](#)



2020年5月22日 退任
市庁舎には市民、職員合わせて約1,500人が集まり12年の労をねぎらった。

写真提供 株式会社タウンニュース社

2020. 12. 1発行
『おだわらを拓く力』制作委員会
非売品